

論文審査の要旨
(Summary of Dissertation Evaluation)

博士の専攻分野の名称 (Major Field of Ph.D.)	博士 (教育学) Ph.D.	氏名 (Candidate Name)	山内 勝弘
学位授与の要件	学位規則第4条第1・2項該当		
論文題目 (Title of Dissertation) 多読が学習者の語彙推測能力に与える影響 -文脈からの推測に焦点を当てて-			
論文審査担当者 (The Dissertation Committee)			
主 査 (Name of the Committee Chair)		教授	小野 章
審査委員 (Name of the Committee Member)		教授	松見 法男
審査委員 (Name of the Committee Member)		准教授	西原 貴之
〔論文審査の要旨〕 (Summary of the Dissertation Evaluation)			
<p>本論文の目的は、学習者が持つ語彙推測能力における多読の効果を検証することであった。序章では、研究の背景と目的を述べ、本論文の意義を示した。</p> <p>第1章では、多読と文脈からの推測に関して先行研究を概観した。先行研究の成果として、文脈からの推測が指導可能である学習者の能力（語彙推測能力）として捉えることができ、品詞特定技能・文脈活用技能・意味類推技能の3技能に分類できる点を述べた。その上で、語彙推測能力の指導法として、(1) 容易な教材の使用、(2) 大量のインプットの供給、(3) 高い読解力の育成、(4) 明示的な推測訓練の4点を挙げた。先行研究の限界点として、(1) 学習者の語彙推測能力のどの技能に多読が効果を及ぼすか検証されていない、(2) 学習者の多読における取り組みや未知語に対する方略使用の影響が明らかにされていない、(3) 未知語の推測や語彙推測能力が付随的語彙学習にどれほどつながるか明らかにされていない、という3点を指摘した。以上の限界点から、研究課題として以下の3点を挙げた。</p> <p>課題1. 多読によって語彙推測能力のどの技能が向上するか。 課題2. 語彙推測能力を高めるために学習者は多読にどのように取り組み、未知語をどう対処するべきか。 課題3. 付随的語彙学習は未知語の推測や学習者の語彙推測能力とはどのような関係があるか。</p> <p>第2章では、1つ目の研究課題に答えるべく、多読・方略指導・文脈指導の3つの指導法が学習者の語彙推測能力に与える影響を検証した。その結果、多読は語彙推測能力のうち、文脈活用技能に対して最も効果が大きいことが明らかになった。また、各指導法が語彙推測能力に与える変化に統計的な違いは見られなかったものの、多読については3つの指導法間で最も変化量が少なかった。この結果から、多読が語彙推測能力に与える効果は限定的であり、その効果を増大させるために多読と明示的な推測訓練を組み合わせた推測訓練型多読が有効になりうることが示唆された。</p> <p>第3章では、推測訓練型多読が学習者の語彙推測能力に与える効果を検証した結果、品詞判定技能と文脈活用技能に関しては指導前よりも若干の向上が見られた。また、対象者を習熟度で上位群と下位群に分類し、習熟度と語彙推測能力の変化量について検証した結果、上位群では意味類推技能に指導前よりも減少が見られた一方で、下位群では全ての技能が僅かに向上していた。これらの結果から、推測訓練型多読が特に習熟度が低い学習者にとって有効である可能性が示唆された。</p> <p>第4章では、2つ目の研究課題に答える調査を実施した。具体的には、学習者に推測訓練型多読を</p>			

行い、学習者の (1) 多読への量的な取り組み (読書量・本のレベル・学習者の習熟度・読解速度・内容の理解度)、(2) 多読への反応・本の読み方・選書方法、(3) 未知語に対する方略の使用頻度、(4) 推測に使用する知識源や処理過程という 4 つの観点から、それぞれ語彙推測能力の変化に影響する要因について検討した。語彙推測能力が向上した学習者と減少した学習者を比較した結果、(1) 教材レベルと語彙推測能力の変化に弱い関係があり、(2) 読書の楽しみ方に違いが見られ、向上した学習者は容易な本を速く読むことが明らかになった。また、未知語への対処については、(3) 無視・推測・辞書使用の使用頻度の変化に違いはないが、推測は指導後で最も頻繁に使用された方略であり、(4) 向上した学習者は背景知識や文脈の知識を使用して推測するようになる一方で、減少した学習者は母語の音韻知識に頼り、推測した意味の確認を行うようになることがわかった。

第 5 章では、3 つ目の研究課題に答えるため、(1) 未知語の推測と読解を通した付随的語彙学習にはその学習率に差があるか、(2) 語彙推測能力の各技能の熟達度と読解を通した付随的語彙学習の学習率はどれくらい関係が強いのかの 2 点を検討した。その結果、(1) については、翻訳式テストにおいて、学習者が未知語を推測する場合の学習率は、読解を通した付随的語彙学習の語彙の学習率と比べて 2 倍程度になった。また、(2) については、品詞判定技能と意味類推技能は付随的語彙学習と弱い相関関係があった一方で、文脈活用技能では相関が見られなかった。

第 6 章では、各章の内容を要約し、第 1 章で示した研究課題に対して総合的に考察し、教育的な示唆と今後の課題を述べた。

(課題 1 への考察) 学習者は多読によって未知語に関わる文脈上の手がかりを発見できるようになり、方略指導と組み合わせた推測訓練型多読によって品詞を判定し、文脈上の手がかりを発見できるようになる。このことから、学習者の品詞判定技能が低い場合は推測訓練型多読を行うことが良いと示唆された。

(課題 2 への考察) 語彙推測能力を高めるために、多読で容易な教材を選択してから徐々にレベルを上げ、読書を楽しむことができる本を選択することが重要となり、加えて未知語を推測する際にはトピックに関する背景知識や文脈の種類に応じた知識を使用することが効果的となる。これらの結果から、語彙推測能力涵養のためには学習者は教材を低レベルから高レベルへと上げていくべきであり、背景知識を有する興味・関心・専門に合った教材を選択する必要があることが示唆された。

(課題 3 への考察) 推測と付随的語彙学習とでは単語の学習率に 2 倍の差が生じたことから、未知語に遭遇した際には読書を止めて推測したり、未知語をメモするなどの意味を確認する工夫を行ったりすることが語彙推測能力の向上には有効となることが示唆された。また、品詞判定技能と付随的語彙学習の関係から、推測訓練型多読が学習者の語彙学習に有効な手段となりうることが示された。

本論文は、次の 3 点において学術的および教育的意義を高く評価することができる。

- (1) 学習者の語彙推測能力における多読の有効性を、他の推測訓練との比較や組み合わせによって検証した点
- (2) 語彙推測能力を涵養する要因について、多読への量的な取り組み、多読への反応・本の読み方・選書方法、未知語に対する方略の使用頻度、推測に使用する知識源や処理過程の 4 つの観点から分析し、語彙推測能力の涵養に寄与するものを明らかにした点
- (3) 推測時と内容理解時における単語の学習率の違いや付随的語彙学習と関係する語彙推測能力の技能を明らかにした点

以上、審査の結果、本論文の著者は博士 (教育学) の学位を授与される十分な資格があるものと認められる。

令和 6 年 2 月 13 日

備考 要旨は、A4版2枚 (1,500字程度) 以内とする。

(Note: The summary of the Dissertation should not exceed A4 size, 2 pages (about 500 words).)